

説明文の授業づくり——「幻の魚は生きていた」(二年)

今回、生徒一人一台の学習者用デジタル教科書(※)が試用できる環境に恵まれました。そこで、それを使って、豊富な資料を取捨選択して活用する説明文の授業を行ってみました。

1 説明文、ああ説明文

国語の読み物教材には文学と説明文とがありますが、皆さん、どちらを教えるのが好きですか? ……はい。八割以上の人が「文学!」と答える声ですが、私には聞こえてきます。私は文学部出身。授業で文学を取り上げるときはちよつと気が合いが入ってしまいます。説明文教材がつまらないわけでは全然ないのですが、私にとっては、授業にかける思い入れが文学教材よりは小さいというのが正直なところです。

その原因を考えたところ、どうやら私の説明文の授業がマンネリ化しているらしいからという結論に思い至りました。今までの説明文の授業パターンは、段落分けをして、文章構成を考えて、要約

ニユースを、さまざまな角度で取り上げて描き出しているのが、この文章の魅力であり、特徴だと感じました。

② 悩ましい要旨・要約

次に、この教材で、どんな読む力を身につけさせるのかという視点で分析をしていきます。そのいちばん重要な手がかりは、教科書の学習の手引きです。ここで、どんな力を育成することを目ざした教材なのかを確認します。この教材は「要旨を捉えること」と「自分の考えの形成」の学習として位置づけられていることがわかります。

「要旨」とは、筆者が述べたいことを中心。「要約」は、「要旨」を押さえて短い文量で簡潔にまとめること。それはわかるのですが、「要旨を捉えて○字で要約しましょう」と授業でそのまま取り組ませても、これがなかなか難しい。

学習活動の設定が十分に練られていないと、「何のために要約をしなきゃいけないの?」「なぜ○字なんだ?」などの思いを生徒に抱かせてしまい、機械的に要約をさせるといって指導になってしまいがちです。

そこで、要約の学習をするときには、なるべくそれが自然と行われるような、

2 「幻の魚は生きていた」の授業づくり

① この教材の魅力は何だ?

まず、じっくりと教科書を読みます。何度も読んでいくうちに、最初は「つまらないなあ」と思っていた文章でも、おそらくさがわかってきます。二度、三度

リアルな活動を設定するようにしました。今回は「幻の魚が見つかった日の新聞を作る」という言語活動を設定することにします。説明文を新聞記事として書き換える際に、内容を簡潔に要約していくことになりま。その活動を通して「要約ってこうすればいいんだ!」という学びが生まれるように意図しました。

③ デジタル教科書をこう生かす!

この言語活動、実は、デジタル教科書収録の資料を見ていくなかでひらめいたアイデアでした。収録資料は次のとおりです。

- 【動画資料】(インタビュ映像)
田沢湖におけるクニマスと人々とのつながり
- 西湖におけるクニマス保全の取り組み
- 【新聞記事】(二紙)
クニマス再発見のニュースを伝える新聞記事

動画資料が二つ。どちらも、当事者に実際にインタビューした貴重な映像です。それと新聞記事が二つ。実際に報道されたクニマス再発見の新聞記事です。

これだけの豊富な資料を使わない手はありません。しかも、ただ単に映像や記事を見て終わりではなく、それを活用す

と繰り返して読みながら、子ども目線(○)と君はここに反応するだろう、中学生との接点はこのへんにありそうだ)、大人目線(不思議だなあ、おもしろいなあ、なぜだろう)、そして教師目線(生徒の学習履歴、指導事項との絡みなど)と、いろいろな目で読んでいきます。

このように読み込んで絞込んだこの教材の魅力、それはなんといっても「幻の魚」というキーワードでした。絶滅したと思われていたクニマスが、ひっそりと生き延びていた。しかも全く別の場所とどうして? この謎めいた展開と、びつくりの再発見とが教材のキモであると感じました。文章には、クニマスが絶滅した経緯や、昔から田沢湖周辺で大切に扱われてきたという歴史、そしてクニマスを探すために尽力した三浦さんの奮闘が書かれています。一つの驚くべき

ような学習活動を考えたいと思いましたが、そこで、ちょうど新聞の現物もあることだし、それを学習モデルとして参考にさせて、新聞に書き換えるという言語活動を思いついたというわけなのです。

デジタル教科書の豊富な資料は、生徒を受け身の存在にしていまいがちです。しかし、豊富な資料を取捨選択して活用するという活動にすることで、生徒が能動的に情報を受け取り、表現していく学習にすることが可能となるのです。

それでは、私が実際に行った授業をご紹介します。本校では、生徒一人一台の学習者用デジタル教科書が試験的に使用できる環境であったため、今回はそちらを使ってみました。しかし、指導者用デジタル教科書やノートなどを使って授業を行うことも十分可能だと思います。

3 こんな授業をしてみました

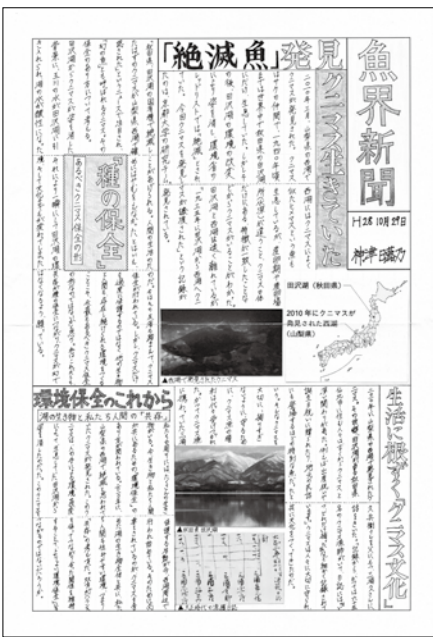
▼ 第一時

新聞に取り上げる記事の内容を考える

本文を通読した後、デジタル教科書のワーク「文章の構成を考えよう」を使っ



図2 黒板ツール。教材本文から抜き出したキーワードや挿絵を、自由に動かすことができる。



て、自分が新聞で取り上げたい内容をメモさせていきます(図1)。

▼第二時 インタビュアー動画を記事に取り入れる

引き続き、新聞に取り上げたい内容の構想を練る活動を行います。このとき、生徒にデジタル教科書の動画資料を紹介しました。そして、これらの内容を、自分でインタビュアーしたという設定で、必ず新聞に入れるよう指示をしました。

①ラフを作る

A3判の新聞用紙と、教科書の挿絵や図表を抜粋して印刷したものを用意しておき、ラフを作らせます。重要度を考えて記事の配置や大きさを決め、それらを用紙に割り付けていくのです。ここで、学習モデルとして、デジタル教科書収録の新聞記事を提示しました。

②見出しの表現について学ぶ

新聞の見出しには、助詞を省いたり、体言止めをしたりと、独特の文体があります。また、ニュースの概要を伝えるとともに、読者が思わず読みたくなるような表現も意識されています。

しかし、多くの生徒はそうした表現になじみがないので、「クニマスについて」などとレポートのようなタイトルを付けて

それを支援してくれるのが、デジタル教科書の「黒板ツール」です(図2)。このツールは本当によくできていて、文章中から使いたいキーワードを選択するだけでそれが即座に抜き出され、並び替えなどの加工をすることができます。生徒たちはこれを使って、キーワードを落とさずに要約をすることができました。



図1 ワーク「文章の構成を考えよう」を使って、取り上げたい内容をまとまりごとに整理した画面。

てしまっていました。そこで、急ぎよ、本物の新聞を用意して、新聞で使われる見出しの言葉はレポートとは性質が異なるものだ、ということを押さえました。

▼第三・四時 本文を要約して記事を書く

ラフで大まかな内容が決定したら、清書をしていきます。限られたスペースにぴったり収まるように、内容的に要約した文章を書かなければいけません。

▼第五・六時 社説を書いて新聞を完成させる

記事を書きあげたら、最後に「社説」として意見文を書きます。生徒に配布した新聞用紙には、左上に社説を書くスペースをあらかじめ設けておきました。社説には、取り上げた記事に関連させた自分の主張を書くことになります。生徒たちは「クニマスの絶滅と復活が私たちに教えてくれること」「幻の魚と生きていくために」といったタイトルで自分の考えを述べていました。

こうして、記事・見出し・写真や図表・社説を組み合わせた「幻の魚」が発見された日の新聞」が完成しました。

○授業の趣旨
教科書の説明文、デジタル教科書の資料などをもとに、新聞の形式で、読み手にわかりやすく情報を構成する。

○ねらい

- ・説明文の要旨を捉え、重要な内容ごとに記事にまとめる。
- ・新聞の紙面の特徴を理解し、読み手にわかりやすい表現を工夫する。
- ・この文章から、自然との共生について考えたことを意見としてまとめる。

○授業の流れ ※アはデジタル教科書の操作

第一時

- ・通読する
- ア 朗読を再生
- ・記事にまとめる内容を考える
- ア 文章の構成を考えよう

第二時

- ・記事にまとめる内容を考える
- ア おおまかな内容を捉えよう
- ア 文章の構成を考えよう
- ア インタビュアー動画を見る
- ・ラフを作る

第三・四時

- ・ラフを作る(続き)
- ・清書用紙に写真や図表を貼る
- ・本文を要約して記事を書く
- ア 黒板ツールで要約

第五・六時

- ・社説を書いて新聞を完成させる

4 デジタル教科書で、どう変わった?

説明文を新聞記事に書き換えるという発想自体は、それほど珍しいものではありません。その授業が、デジタル教科書によってどう変わったのか。私なりに気づいたことを書きたいと思います。

第一に、豊富な資料を活用した学習ができたということ。さまざまな資料を、自分なりに取捨選択して活用し、表現する学習を実現することができました。

第二に、「黒板ツール」などのおかげで、具体的な手順を追って、要約の学習が進められたということ。要約のように頭の中で行われる行為を、目に見える形でわかりやすく操作することができました。

今回の学習のようにデジタルとアナログを組み合わせることは、中学生にとって、活動の選択肢や自由度が広がっていると感じました。さらにICT環境が発達すれば、この学習を全てデジタルで行うこともできるようになります。そのとき、どんな国語の学びが生まれるのでしょうか。想像するだけで、ちょっとわくわくしてきます。そうなったら、説明文の学習も今より大きく変わっていくことでしょう。